

教職員の
おすすめ図書
SEASON 2
vol.10



図書館司書 角井 貴乃



国語科教員 北村 円

SEASON2 最終回 読書のおすすめ

【編集者】今回は、シーズン2の最終回ということで、特定の本の紹介ではなく、国語科の北村先生と、司書の角井さんに読書についてさっくばらんにお話しただこうと思います。どうぞよろしく願います。

【北村 角井】 よろしく願います。

子どもの頃の話

本が好きな人についての話

【北村】 比較的自由に読書に関するお話をして良いとの事なので、私の読書のはじまりからお話しようと思います。本を読むかどうかの前に、まずは「ストーリーがあるものが好きだ」という気持ちが根底にありました。これは今もそうです。幼い頃、母から昔話を読み聞かせてもらい、それから童話へと変わり、小学校三年生の頃には神話に辿り着きました。

【角井】 私も小学校三年生の頃、神話とか花言葉や星座の神話とかが大好きでした！ノートに書き留めたりして楽しんでいました。

【北村】 そうなんですか？ 一緒ですね！

…まあ、そこから様々な物語に触れるよう

になり、物語の背景を知りたいという欲求から、新書を読むようにもなりました。根源には、「もっとたくさんストーリーを知りたい」という強い思いがあったように思います。

【角井】 なるほど。ストーリーのあるものを追い求めているうちに読書に辿り着いたんですね。では私も、私の読書のはじまりをお話しますね。私は最初から読書が得意なわけではありませんでした。小学生の頃、読書感想文の課題図書を親に買ってもらわれて、嫌々読んでいた程です。特別に本好きというわけではありませんでした。でも、本がある場所、小学校の図書室や、書店のような空間が好きだったのです。

小学生の頃の私は、ドッチボールが大好きでした。25分という、今思えば短い休み時間を心待ちにして、誰よりも早く校庭に走り出ていましたね。その時よく遊んでいた子たちが、雨天時には図書室で過ごしていたんですよ。流れて私も行っていました。また、大勢で居たくない日や、遊び相手を見つけれない日には、一人で図書室にいきました。図書室の隅に積み上げられた段ボールの隙間に身を隠し、小学生向けの『世界文学全集』などを読んでいる自分に酔っていました。独特の匂いがある薄暗い雰囲気が居心地よくて、そうして



いるうちに自然と本を読むようになったんです。

大学時代には、書庫や研究棟の図書館へ足を運びました。そこには明治時代や大正時代の古い書籍が並び、今では触れることのない貴重な資料に、当時は素手で触ったり、隅に蜘蛛の巣を張った本棚を見つけては、どんな本が置いてあるのかと、興味本位で手に取ったりしました。内容は全然わからないんですけどね。それでいいんです。

【北村】 わかりますーあの何とも言えない匂い…。インクや古い紙の匂いもありますが、ほこりも交じってそうですね。

私もそんな匂いの古い本に昔からときめきを持っていました。子どもの頃、家の近くの図書館へ行って、禁帯出(貸出ができない本。貴重書など)のコーナー

で、びっくりするくらい大きな本をみつけて。子どもですから、何の本かなんてわからないけど、とりあえず引っ張り出して読んだんですよ。近くのソファアの上に広げて。そしたら「バリバリバリ…」って。

【角井】 あ！何年も開かれてない本の音ですね！

【北村】 そうなんです。それが楽しくてページをめくってました。こんな読書の楽しみ方もありますよね。内容は二次の読書もあっていいと思います。

【角井】 「お客様がくるのは何年ぶりでしょう。どうぞいらっしやいませ。」という感じがしますね。どうぞ

本を読むことが好きな人というと、一般的には「とてつもない量の本をすごい速度で読んで、しかも内容も理解している人」みたいなイメージがあると思うんです。でも実際には、この話のように様々なジャンルの本を少しずつ味わうタイプの人が読書好きには多いように感じます。よくわからない本を手に取り、訳知り顔で「へえ」と呟いて満足したりもする。毎度毎度、隅々まで読み込んだり、深く追求したりするわけではありません。パラリと読んで本棚へ返し、また次の面白い本を探しに行く、そんなスタイルです。もちろん、ひとつのジャンルや作家を追求して楽しむ人もいらっしやいますが。

デジタル化の話

【角井】 古い本の話をする、最近ではデジタル化がすすんでいます。無料で昔の本を見ることができるようです。以前、翻訳をテーマにした記事を書いた際、明治時代の『フランダースの犬』を紹介したのですが、その翻訳では、登場人物の名前が全く違ってますよね。ネロは清(きよし)だし、パトラッシュはプチだし(笑)。でも国はベルギーなんです。楽しすぎて生徒に紹介したくなってしまっ！さらに、デジタルアーカイブで蔵書をそのままデジタル化したので、落書きもそのまま残っているんですよ。最初は個人所蔵だったんでしょね。感想が書き込まれてるんですよ。物語に感動した様子や、悪役への恨み辛みが綴られていて、まるで昔の人と通信しているような気持ちになります。

こんな風に、古い本でもデジタル化されたものの良さもあります。拡大機能などがなければ見づらいような挿絵や、ほっておいたら消えてしまう鉛筆の落書きも残せるという点で、非常に魅力的です。公共図書館の古い蔵書の落書きに関する本なんかも出ているので、興味があれば読んでみてください。司書として本への落書きは許せませんが、いろんな形で古い本に触れることは、一つの楽しみ方であると思います。

【北村】 私自身はさっきも言った通りストーリーがあるものが好きなので、本に限らず、歌の歌詞でも、ゲーム、漫画、それぞれCMだろうが、好きなストーリーだとももしろいと感じたら嬉しくなってます。昔だとそうはいかなかったわけですね。極端な話を

すると、紙媒体しかなかった。それが今やスマホであるとか、ゲーム機器とかっていうのが手に入りやすくなって。なので、じゃあ自分はそっち側に全部シフトするのになって思ったことがあったんですよ。本も紙媒体では読まなくなるんじゃないかと。

でも、最近やっぱり本をめくるという動作をしたくなって、この…本を開ける、めくる時のっていう、紙がすれ違うみたいなの、触れ合う音みたいなのが、いいんですよ。読みながら、なんかそのページをめくるということにすごい楽しみを覚えてる自分がいたんですよ。思い返すと、図書館で大きな本をめくっていたあの頃からでしょうね。まあ言ってみたら電子デバイスでもスワイプがあるから、「ページをめくる」に似たものはあると思うんですよ。でも何かが違うんですよ。これにまつわるエピソードで、最近、自分でも面白いなって思ったのが、昔自分が学生時代に書いた授業ノートが出てきたんですよ。そのノートはそのときの自分の流行りで、下敷きを使わずに書いていたんですよ。そうすると、紙面がポコポコするじゃないですか。するとね、めくった時のあの

【北村】「ペリペリペリ…」(笑)

【角井】 すごくわかります！なんか、隣のスペースに移ったりするんですけど、それがまたよくて。私もノートをたくさん取る授業で、同じようなことをしていました。特に歴史のノートは、あの凸凹が、見返した時に古い本みたいな感触を生むんですよ。テスト勉強

強が、歴史を紐解くような感じになって、好きでしたね。

やっぱり、この紙をめくるとっていうのが面白い。別にそれでデジタルが駄目とかっていうことじゃなくて、それぞれに楽しみがあるというか。日本独特のものな気もするんですけど、読み手の視線とかこっちからめくるから、視点はこう動く、だからこうしよう！みたいながあります。言語や文化によって違うんでしょうけど。特に漫画のコマ割りにかけては、日本ってすごいですよね。いろんな形の四角の集まりなのに、何も考えなくてもストーリーが頭に入ってくるんですよ。

【北村】そうですね、こうめくった瞬間の、それこそ小さいコマがいっぱいあるっていうのも面白いんですけど、めくった瞬間に見開きだった時の衝撃もすごくて。小説ってそういうことがしづらいで、コマ割りの妙は、漫画だけの楽しみなのかな。

生徒にとっては漫画の方が読みやすいかなって思ってたんですよ。でも、話をしていると、あんまり漫画を読んだことがない子とかは、どこ行っているかわからないようです。4コマ漫画は上から下に行けばいいんですけど、通常の漫画のコマは左右で見るときもあれば、見開きで実はこう行ってみたいなときもあったりとかして。結局「どう読んでいいかわからない」「ってこういうふうに言われたときに、「あ、そうか。読む力がないと順番どおりに読めないんだ」って。場合によっては小説の方が読みやすいのかなっていろいろ

をふと思ったんですよ。で、そう思ったときに「となると、語彙力がないと文章って読めないんだしな」ってなってる。「読むってなると簡単な方かどっちの方がいいんだ?」「映像の方が慣れてるのか?」などぐるぐる考えてしまってる。分かりやすい授業をするにはと考えると堂々巡りをしていくっていうのが私の最近の悩みですね。

【角井】わかります。語彙力って、読み・書きが一般的ですが、ニュアンスを理解しているかどうかでも語彙力だと私は思っているんですよ。それはね、漫画でも本でも、文字を追う経験の蓄積で…つまり読書で育まれると思っています。ただ読めばいいってもんでもないんですよ。



共通テストの問題がそうだと思うんですけど。漢字には意味とかニュアンス的なものがあってそれを理解できていれば、共通テストの問題は大体解けるんですよ。たとえばその単語を読めない・書けない場合でも、「この漢字はマイナスのイメージだ」だけではなく、「嫌な雰囲気だけど慣習として避けているイメージを持つ漢字だ」みたいに理解できてると解けるんです。これってただ漫然と読書をしていてもだめなんですよ。物量ではない。読書中に知らない単語があったとして、ただ飛ばして、空白で読むのではなく、「前後からこういう意味かな?」とか、「前はこういう場面が出てきたっけな?」とか考えられないと、ニュアンスをとらえるっていう力がつかないと思うんです。推し測るっていうのか。そこで立ち止まって考えることって、知らない単語を辞書で引くよりも大事かもしれないです。辞書で調べても、忘れてしまったら意味がないですからね。

【北村】 確かにあの出題の仕方だと意味が理解しているって大切ですよ。

似たことで、私自身が大切だと思うのは、ストーリーの型を理解しようとする事です。同じような型の話って、よくありますよね。いわゆる王道と呼ばれる型があって、その王道と全く同じストーリーで、キャラクターだけが少し違う話もあります。逆に、王道を知っているからこそわかるアレンジバージョンもある。例えば、シンデレラストーリーという言葉があるように、不憫な女の子が頑張った結果、成功を掴む話っ

て世の中に溢れていますよね。

ところが、生徒と話していると、本をたくさん読んでいる生徒でも、前に読んだ本の内容をあまり覚えていないと言っていました。同じような物語を見ても、もう一度感動できるのは素晴らしいことですが、「前に似たような話があった」と気づくことも大切です。読書はただ紙をめくっているだけでは、頭の中に知識や世界観といったものが入ってこないんです。瞬間的には入ってきているのかもしれませんが残らないんですよ。それは寂しいじゃないですか。

今までで一番衝撃を受けた生徒の質問は、a u の三太郎CMで、浦島太郎役の浦ちゃんが乙ちゃんに会いに行く理由を聞かれたときのことです。「浦島太郎の物語を知っている?」と聞くと、「聞いたことはある。

あれやる? 浦島太郎が竜宮城のお姫様に会いに行くやつやる?」と。うーん惜しい! そのお姫様が乙ちゃんなんだよ! となってしまって。浦島太郎の物語を知らなければ、CMで浦ちゃんが乙ちゃんに会いに行く姿は、ただのストーカーのように見えてしまうかもしれない。面白さが伝わらないですよ。この時に、怖い想像をしてしまったんですが、三太郎CMでは、桃太郎とかぐや姫が結婚しましたよね。いつか桃太郎のお嫁さんとかぐや姫だと思いついてしまうお子さんまでくるのでは...と。ともあれ、私が思うストーリーの型の理解というのは、こうしたいわゆる「元ネタ」がわかっている状態に近いのかもしれない。

本を読んだり、映像を見たりした時に、できれば「似ているけれど、王道とは少しずれたこの本のこういうところが素晴らしいから好きなんだ。」というところまで分析して、言語化できるといいですね。読書会なんかいいかもしれません。もし、こうした型の積み重ねがあれば、授業や大学入試でも、内容を理解することの助けになると思います。

【角井】 小論文の授業で、生徒に質問を受けたり、書き方を教えたりすることがあります。『蛭雪時代』の小論文特集で、「ドラマを見ていて、続きが想像できる人は小論文が得意」といった内容の記事がありました。これって先生がおっしゃっていたストーリーの型の理解だと思えます。ドラマを見ていて、「はい、次はこうなります」とか「こんな人が出てきます」といったことは、ある程度、映像作品を見ていれば、カメラ





アングルや天気などで予想できるようになりますよね？例えば、主人公たちの恋が成就したから、話を展開させるためにそろそろ新しいキャラクターが出てくるぞ…大体元恋人が出てくるんだぞ！という感覚です。ストーリーの型を理解していると、オリジナルのストーリーでも、ある程度骨子は決まっていることに気づきます。それを掴むことができると、何か、例えば、話し方、ライティングスキル、語彙力が変わってくるかもしれません。文字のストーリーであろうと、映像作品であろうと、ストーリーの骨子を掴むことが重要です。

「なぜ本を読まないといけないのか？」

【北村】「趣味は読書です」という人にもいろんな人がいますよね。言い方は悪いかもしれませんが、ここにはランキングのようなものがあると思うのです。私は職業柄、読書好きを自称していますが、文字を吸い込むように読書をする人たちとはレベルが違います。本がないと生きていけないという人たちもいます。読書家と呼ばれるような人たちは、一日一冊以上を読み込むほどの読書量です。いくら私も好きとはいえ、軽い気持ちで「趣味は読書」と言いつらい。ひと口に、読書好きといっても、様々なレベルがあるのだと思います。

ただ一つ言えるのは、本を読んでいる人と、そこから内容を深く理解し、さらに知識を広げている人とは、読書体験に大きな差があることは事実です。

【角井】私も仕事柄、読書好きという前提で話されることが多いですね。ただ、先生のおっしゃるようなどんな趣味でもそうですが、楽しみ方は人それぞれだと思います。写真が趣味でも、山や風景を撮りたい人、生き物を撮りたい人、部屋の中で小物を撮りたい人、カフェで綺麗な写真を撮りたい人など、様々な人がいます。写真を見るのが好きな人も含めたら、さらに多様でしょう。読書に関して、色々な楽しみ方があります。ある特定の方法で読書をする、力がつくという人もいます。しかし、読書は他人と競い合うものではありません。読書好きだからといって、高尚な人間というわけでもありません。また、文

章のスタイルもそれぞれです。毎月決まったファッション雑誌を買って、好きな芸能人のコラムを読む人もいれば、新聞を読むことが好きな人もいます。読書の楽しみ方はそれぞれであり、深く追求している人もいれば、もっとカジュアルに楽しんでいる人もいます。

ところで先生は、「なぜ本を読まないといけないのか？」という問いについて、どのようにかंगाえていらっしゃるのでしょうか？実は先日、辻村深月さんの『あなたの言葉を』というエッセイを読んだのですが、そこで辻村さんが子どもに質問されていたんですが、大人は読めって言うけどどうして？って。その回答がずっと私が思っているものと同じで、嬉しかったんです。でもこれって人それぞれ回答がある質問だと思うので、先生のお考えをお聞きしてみたくて。

【北村】月並みに言えば、本は安全に違う世界に入っていける手段だからです。私は海外に行きたいという気持ちはあるのですが、実際には怖くてなかなか踏み出せません。基本的に性格がきっちりしていないので、何かがあると「あれを抜けてた」「これを忘れてた」といったミスを連発してしまうのです。しかも、それに気づかないことも多く、海外に行った時に何かをどこかに忘れてきて、帰国後に気づくような事態も容易に想像できます。物の紛失だけであれば、自分の責任で済むかもしれませんが。しかし、海外では自分の無知によって、意図せず悪いことをしてしまったら、相手に失礼なことをしてしまう可能性もあります。私は実



際には人見知りで人と話す時に「この人を傷つけてしまったらどうしよう」と不安に思うことがよくあります。ましてや、文化も考え方も異なる海外の人であれば、自分がいつどこで相手を傷つけてしまうか、全く予想がつきません。相手がどう反応するかわからないと思つと、怖くてたまらないのです。その点、本は一方通行です。私は読むだけで、向こうは伝えてくるだけ。だから、相手を傷つける心配がありません。そういう意味でも、本は私の心を楽にしてくれます。世

界観が楽しそうであれば、純粹に楽しむことができます。悲しい話であれば、涙を流し、腹が立つ話なら主人公と一緒に怒ることもできます。本は登場人物の細かい心理描写を通して、彼らがどんなことを考えているのかを知ることができます。これは、実体験をする前の練習のようなものだと考えています。本に触れることで、今まで自分が腹を立てていた相手と似たようなキャラクターが出てきたときに、「あ、あいつもそんな風に考えてたのかもしれない」と気づき、怒りが収まることもあります。読書は、安全に自分の知らない世界を知ることができる手段です。さらに、知識を増やし、自分を成長させることもできます。もちろん、やり方次第ですが、読書は最も簡単なレベルアップ方法の一つと言えるでしょう。

【角井】なるほど、確かに心身ともに安全に様々な経験をできるのが読書ですよ。言語化することが上手い書き手との出会いで、おっしゃったみたいに感情が整理できることも多いです。自分のもやもやを、はっ

きり言語化してくれていて。本を読んでいると、「そうそう。そういったかったの!」という経験が何度もあります。

ところで辻村さんの答えですが、「読書は楽しいから」なんです。私は読書は常に、楽しいということが入り口であってほしいのです。確かに読書を通して何かを得られるかもしれませんが、しかし、楽しいから読むのであって、別にスキルを得ることが目的ではありません。読解力も、語彙力も、読書で得られる力で、読書に必要ですが、どこまでいっても「副産物」ということを忘れてほしくない。「私は自分が好きだから薦めているの。そこで得られるものもなくもないよ」という気持ちが大きいですね。学校の司書としては良くない回答なのかもしれませんが。

では、私が一番読書で育んで欲しい力、読書で得られると考えている物何か。それは読解力でも語彙力でもない、アクセスツールとしての「読書力」なんです。好きなものができた時に、それを楽しむためのツールはたくさんありますよね。本、雑誌、SNSやテレビ、ライブなど、様々な方法で好きなものにアクセスできます。また、アクセスツールはそれぞれに個性がある。そのアクセスツールを使用しないと得られない情報があります。読書もアクセスツールの一つです。本を読むことでしか得られない、好きなものの情報があるんですよ。発信者もわかり、書くことでしか表現できないものを文章に載せて届けています。この時に読解力が高ければ、書き手のメッセージを正確に受け取ることができます。さらに、語彙力が高ければより鮮



明に内容を理解することができるんです。
好きな物へのアクセスツールをたくさん持っていれば
いるほど、楽しい人生になると私は思っています。好き
な物に、特定の方法でしか触れられないとしたら、そ
れは残念じゃないですか？

【北村】 そのアクセスツールっていう考え面白いで
すね。

【角井】 アクセスツールの多さって、ひいては人間と
しての器の大きさにつながっているのだと思います。

私自身、大きく広くやわらかい器の持ち主でありたい
と常々思っているのですが未だ道半ばで。先ほどは好
きな物へのアクセスツール」と言いましたが、これが、
近くにいる生身の人、例えば友だちになりたい相手と
かになった時にアクセスツールの数が試されると思う
のです。アクセスツールが、自分が取れるコミュニケーション
の数の多さに変身するんですよ。「この人には、
こう話せば楽しんでもらえるかな？」「この人には、
このようなアプローチを試してみよう」といったよう
に、相手によってコミュニケーションの取り方を変え
ることができます。なので私は「なぜ本を読まない
いけないのか」という問いかけには「楽しいから。他
の楽しいも良いけど、本の楽しいも良いよ」と答えて
います。

ほんとは怖い「おすすめ本」

【北村】 コーナーを否定するような話をして申し訳な
いんですが、「おすすめ本」ってハードル高くないで
すか？ よく聞かれるんですけど、すごく困るんです
よね。そもそも読書って、読んだ時に自分がどう感じ
るかっていうところが大事なんであって、人様に、「あ
れええで」って勧められたら読みたいって思うんです
けど、そこで結局何も感じへんなかったら、あの人に
とってはいい本だけど自分にとってはそうでもないっ
ていうか、合わない本なわけで。だからこそ、言われ
て困るのが、「これを読んだらいいっていう本はあり
ませんか？」とか「小説を得意になりたいんですが、

どれを読めばいいですか？」とか「どんな本を読め
ばいいですか？」っていう質問なんです。どんな本
もあなた自身が、読んでみないとわからないのよって。

【角井】 私は司書なので本を勧めるのが仕事、存在意
義の一つですが、おっしゃる通り困る時もあります。
「この知識をつけたいんです。」とか具体的な問いかけ
があれば別ですが、大体ざっくりしていることが多い
んですよ。

【北村】 確かに読みやすいと思う本はありますが、こ
れは私の感覚なわけで。本当にその人にとって読みや
すいかどうかは分かりません。以前に『はてしない物
語』をおすすめしたことがありますが、あれは私が小
学生の頃に読んだ本なので、中学生以上が対象の学校
に入学したばかりの人に、小学生の頃の感覚で勧める
のはどうだろうか、と少し不安でした。がいる本校で
あれば、みんな読めるだろうと。『はてしない物語』
は想像力を掻き立てる作品なので、特に第一章の、本
を読む自分、主人公が本を読む場面、さらにその中の
物語という多層的な構造を楽しめるかどうかで、その
本がを好きになるかが決まると思ったので選んだので
すが。やっぱり「おすすめの本はありますか？」と聞
かれるのがは難しいですね。

【角井】 人それぞれ読書の好みや考え方が違うため、
どんな本を薦めればいいのか、いつも悩んでいます。
最近では特に、本の表紙も重要視される傾向も見られま

すし、なかなか難しいです。なので、いくつか本を提示して、どれがいいか選んでもらう、という方法を試しています。しかし、万人受けする本というのはなかなかありません。万人に響く本を探すのは難しいですが、だからといって、特定の層に絞って本を薦めるのも違う気がします。その人がどんな本に興味を持つか、どんな文章を好むかは、わかりません。実際に会って話してみたら少しだけ見えることもあります。よくするのは、いくつか本を用意して最初の5行ずつ読んでもらう方法です。その人が、日本語の文章をどのように理解するのかによって、本の感じ方は大きく変わるものなので、作家との相性も見たくて。特に名作どころの海外小説は、翻訳がたくさん出ているので、同じ小説が課題になった場合でも、読み比べて自分に合った日本語訳を探してもらったり…。

【北村】 以前のおすすめ本、「クリスマスキャロル」の回で、誰が訳すかによって全然違つという話がありましたね。

【角井】 そつでしたね。やはり一番自分に合う本を読んで欲しいです。司書の仕事は相手の好みを推測し、適切な物語を選ぶ必要があります。利用者も司書もどちらも受け手ではいけないのですよ。

【北村】 私もおすすめの本についてお話しする際、特に好きな本があります。ですが、人に勧めるかと言われると、躊躇してしまいます。なぜなら、好き嫌いが

分かれるからです。安易に人におすすめすることができません。しかし、一緒に盛り上がってくれる人がいれば、積極的に共有したいと思っています。楽しさや面白さを共有できるのであれば、それはとても嬉しいことです。例えば、亡くなった作家の伊藤計劃さんの作品も、私はとても好きですが、周りに読んでいない人がいません。誰かに薦めても、共感してもらえないかもしれないと思うと、躊躇してしまいます。同じ本を読んでいる人たちと読書会などで語り合えたら、楽しいだろうなと思います。

【編集者】 私は、一人で楽しむ方が好きですね。共有すると視点のズレとかが気になってしまうから。

【北村】 俗にいう同担拒否つてやつですね。

シーズン3はなにをする？

【編集者】 ありがとうございます。今回でシーズン2は最終回となります。シーズン3は当初は「人生を変えた本」をテーマに据えるののかなと思っていましたが、個人差がありますね。たくさん読書されてきた方ならば人生を変えた本なんていくらでもあんじゃないかと思うし。シーズン3については正直、白紙状態です。笑。

【北村】 そつですな。私自身、本を読むことで、様々なコミュニケーションの方法や、問題解決のヒントを

得ることができました。読書を通して得たものは、私の人生を形作る上で大きな影響を与えています。「人生を「ロツ」と変えた一冊」とまでは言えないかもしれませんが、読書は私の人生において、かけがえのない財産となっています。

【角井】 「人生を変えた」というとトピックが大きくて選びにくいかもしれませんが、「転機になった」とかならハードルが下がって、出しやすいかもしれません。

【編集者】 その人が歩んできた道もありますね。テーマと語り手に決めてもらうのいいし、話にもできましたが読書会もありかとも思います。いろいろな形でしてみたいですね。

今回、読書論について深く掘り下げたいと思った時、真っ先に思い浮かんだのは北村先生でした。そこで、シーズン2の最終回には北村先生に出演をお願いしました。そして、このコーナーですつとインタビューを担当していただいた図書館司書の角井さんにもご一緒していただきました。お二人ともありがとうございます。シーズン3が始動となった時は、よろしくお願いたします。

【北村】 【角井】こちらこそ、よろしくお願いたします！